

でもたくさんあげましょう。

⑪⑧ さてイむ懐しヤ 夢見しる情
見果てイらぬうちに 切りてイねさみ

※こころも懐かしい、夢にまで見せてくれる情、その夢は見てすまない内に途中で切れてしまった。

⑪⑨ 酒む飲み彼氏め 遊女む呼び彼氏め
あたら二十ぬ頃に 死にやちヤすが

※酒も飲みなさい、遊女も呼びなさい、わずか二十代で死んでどうするんですか。

⑪⑩ 彼氏が差す刀 さや二つねさみ
夫二人持ちユぬ 吾身やあらむ

※彼氏の差している刀にサヤは二つありません。夫を二人も持つような私ではありません。

七

⑪⑦ 酒とウむるはくや 身ぬ葉でイむぬ
いかな下戸やてイむ 満ちてイおいしら

※酒とムルハクは体の葉といひます。どんな下戸な方

⑪⑪ 彼氏が家とウ吾家 殿内ぬちヨーちくて
彼氏が家じ見ちやや 吾家じ見ちや

※彼氏と私の家は殿内のチヨーチクと同じだ。彼氏の家と私の家を行ったりきたりしているから。

⑪⑫ 彼氏や門に立ていてイ 眠らゆみ彼女め
面影や立たせ 夢や見らせ

※彼氏を門に立たせたまま寝れますか彼女よ。面影は立ちませんか、夢に見ませんか。

⑪⑬ 彼氏や行くままに 忘れてイどウいちユる
吾身やふぬ間に 泣ちどウしゆる

※彼氏は去って行くが、その内私のことを忘れてしまおうでしょう。私はその間泣いて暮らすしかない。

⑪⑭ 三味線とウ胡弓は 怠り者ぬ仕事
鍬とウヒラ持ちユし 吾夫なしユる

※三味線の弦は、切れたらつなげるが、一度切れた縁は二度とつなぐことはできない。

⑪⑯ 三味線ぬみーずる 童妻心
中ずるになりば 添たぬ心

※三味線の一弦は若妻のようなウブな音で、二弦は永く連れ添った妻のような落ちつきのある音だ。

⑪⑰ 三味線の弦や 切りりばどウ繫じユる
縁ぬ切りてイからや 繫じがならむ

⑪⑱ 三味線に一惚り 弾ちユぬ人に二惚り
二惚りから三惚り な一惚りちちヤむ

※三味線に一惚れ、弾く人に二惚れ、もうすっかり三味線と弾く人に惚れついでしまった。

※三味線と胡弓を手にするのはなまけ者の仕事。鍬とヒラを持つた人を私は夫にします。

128 さやか照る月は 聖人ぬ心
心美らさしどウ 世間照らす

※さやかに照る月は聖人の心、心が美しくあつてこそ世間を照らすことができる。

129 さらばたち別り 明日ぬ夜いもり
明日ぬ夜いもり 真実語ら

※そろそろお別れしましょう、明日の夜またおいでください。真実を語り合ひましょう。

130 咲さぬ花取やい 恋し綾蝶々
真実ぬ思い 無駄になすな

※咲いていない花を取ることはできません恋しい蝶々よ。真実の思いを無駄にしないでください。

131 世間とウリどウりとウ クバやすやすやとウ
繋じある牛ぬ 鳴ちユらとウ思てイ

※世間は静まり、クバの葉はソヨソヨとしているが、つないである牛が鳴くかと思うと安閑としてはおれない。

132 世間やぬがやゆら 赤い障子はやち
花やうしかくち においちヤーすが

※赤い障子を張って花（愛人）をかくせても、においはかくせませんよ。世間が変に思うから気をつけなさい。

133 しのぶ夜ぬ月に 情あてイ給り
他人しらぬうちに しぬでイいもり

※しのんで行く夜の月よ情をかけてください。ほかの

人がしので来ぬ間に、しのできてください。

134 世間や水車 かわすなよ互に
巡てイくる 節むあいどウしゆる

※世間は水車のようなものだ。互いに心変わりしないでおれば、その内いい時が巡ってきますよ。

135 節待ちヨリ待ちヨリ くいぬ節待ちヨリ
くいぬ節待ちユてイ わてや一道

※時期を待ちましょう。時期がきたら二人は一緒に暮らすことができますから。

136 捨てイ妻でイ思てイ 捨てイ言葉するな
アオイぬ花みより 元じ咲ちユさ

※捨てた妻と思つて、捨てゼリフを言うものではない。アオイの花を見なさい。また元から咲くよ。

137 島ぐいぬ兄弟者 むどウさらむ兄弟者
吾家ぬ悪しヤあてイむ 泊まてイいもり

※遠い村からきた親しい友よ、ただ帰せない。みすばらしい私の家ですが泊まっていつててください。

138 島ぐいぬ彼女に かきらりてイ吾身や
切りむ切りららぬ 神ぬ結び

※他村の彼女に情をかけられて、切るに切れない関係になった。これは神様による縁からなのか。

139 島なりや産子前なちユてイ 暮らさゆい
黒潮ひだみりや 暮らしならむ

※故郷にあれば、産んだ子を目の前にして暮らせるが、海をへだてるとそんな暮らしはできない。

140 島ぬ面影や まにまにどウ立ちユる
彼女が面影や 朝夕立ちユる

※故郷の面影はたまにしか立たないが、彼女の思影は朝夕立つ。

①41 島一島やりや 見ちユてイ暮らしゆしが
島ぐいとウなりや 暮らしならむ

※同じ村であれば側で見ながら暮らせるが、他村となると、一緒の暮らしはできない。

①42 しりや何出む なゆる事やしが
しらぬ故なてイドウ ならぬしぬち

※頑張ればどんなことでもできるのに、やろうという意志がないから、何も成就しない。

①43 真実に思ぬ 吾身やりばよ彼氏
いかな雨夜む しぬでイいもり

※心底私のことを思うのでしたら、どんな雨の夜でも

①47 節待ちヨリ待ちヨリ 恋ぬ節待ちヨリ
恋ぬ節待ちユんでイ 年どウ寄たる

※恋の時期を待ちなさいと言われ、時期を待っていたら、いつの間にか年をとってしまった。

①48 島ぬ為尺くち 年寄ため親ほ
御伴しユてイ遊ぶ 今日ぬほーらしヤ

※島の発展に尽力して年老いた方々のお供をして、遊ぶ今日は実にうれしいものだ。

す

①49 すとウ親とウ吾親ぬ かわる事ねさみ

親愛しヤしユーしどウ 吾身む愛しヤ

※舅姑も自分の親もかわりはない。舅姑を大事にする
たずねてきてください。

①44 白髪年寄りや 床ぬ前に飾てイ
産子唄しみてイ 御孫踊い

※白髪の年老いた親を床の前に座らせて、子供は歌を、孫には踊りをさせて喜ばせてあげよう。

①45 島ぐいじ遊でイ むどウる朝方や
袖し顔かくち むどウるしぬち

※よその村で遊んで、朝帰りをする際に袖で顔をかくす有様よ。

①46 世間やぬがやゆら 曇りたや照たや
わてがあぬ事む がにがあゆら

※世間はどうしたことが曇ったり照ったりする。二人の間のいろいろなこともそういうものなのだろう。

ことは、自分を大事にすることにつながる。

①50 澄水ぬ如く 吾が心澄まし
にぐり田ぬ水に 月ぬ照ゆみ

※澄みきった水のように自分の心を澄ませなさい。にこっている田の水に月は照りません。

せ

①51 千里照る月や 吾肝や照らむ
吾肝照らしユーしは 彼氏ね心

※千里四方を照らす月も、私の心を照らすことはできません。私の心を照らすことができるのは彼氏の心だけです。

た

⑮② 高さ咲く花ぬ 吾ぬに及ばゆみ
下枝からつみとウてイ 泣ちどウしゆる

※高い所（身分が高い意）に咲く花（好きな女性）に
どうして私の手が届くだろうか（自分は身分が低い
から）、下枝（同じ身分の女性）からつみとって（選
ぶしか）いくしか方法がないのだろうか。

⑮③ 立ちかわいかわてイ 見しらんでイしりや
うらがうり見りや泣ちユらとウ思てイ

※入れかわり立ちかわり私（親）の姿をお前（子供）
にみせようと思うのだが、そうするとお前が一層悲
しむとって（だから姿を見せないんだよ）

⑮④ 高下駄む要らむ 平草履む要らむ
母がせーか居りや 父む要らむ

※高下駄も草履も要りません。お母さんさえいたらお

父さんも要りません。

⑮⑤ 田皆ウトウマチが ちちやぬはんじちや
何時むかわいならぬ 水草若葉

※田皆のウトウマチ（女の人の名）がつく入れ墨は、
水草の若葉模様でいつも見事である。
はんじち||入れ墨のこと。昔、奄美・沖縄の女性は
手の甲に入れ墨を施す風があった。

水草||魚をよわす草で、和名をリルハコベという。

⑮⑥ 旅ぬ人どウやしが かに愛しやあたる
肝からがやゆら 縁ぬからがやゆら

※旅（他所）の人なのに、こうもいとしく思われるの
は、お互いの気持ちがそうさせるのでしょうか、そ
れとも縁があつたのでしょうか。

⑮⑦ 宝玉やてイむ みがかには錆びる
朝夕肝みがち 浮世わたら

吾身や彼女からどウ 言ちやらとウ思げ

※一緒に暮らそうとだれが先に言ったのか。私は彼女
が先にそう言ったと思つているのだが。

⑮⑧ 肝ぬむちなしや 真竹ぬぐとウ美らさ
義理ぬ節々や中にふみてイ

※世間で取りざたされていることを胸にしまい、心か
らのもてなしは真竹のように美しいものだ。

⑮⑨ 美らさ生まりとウてイ 浅さあるよりか
悪しや生まりとウてイ 深さありんけ

※美しく生まれて軽薄であるよりは、醜く生まれても、
人間は思慮深い方がよい。

ち

⑮⑩ 一道ならならてイ 誰るからが言ちやる

※旅行先の宿で目がさめると昔のことが思い出されて
ならない。夜中の一人寝はさびしいものだ。

⑮⑪ 旅宿ぬ寝ざみ 枕側立ていてイ
思いじゃすさ昔 夜半ぬつらさ

※旅先の宿は浜で草の葉がまくらである。寝ながら
親のことを忘れることはできない。

⑮⑫ 旅や浜宿り 草ぬ葉どウ枕
寝てイむ忘りらぬ 吾親御側

※どんな宝の玉でも、みがかないとさびてしまう。朝
夕心をみがいてこの浮世をわたりましょう。

⑮⑬ 人や肝心 容姿いらむ
カイコ虫見より 臆や錦

①64 人や肝心 顔形いらむ
カイコ虫見より 腹や錦

※人間は気心が大事で、容姿ではない。カイコ虫を見
てごらん、腹はきれいなものじゃないか。

①65 繫チナじある牛ウシは 鳴ナかさばむはかれ
結ムスでイある縁キぬ 解トクきゆらとウ思ウムてイ

※つないである牛（妻）は鳴かせて（騒がせて）もい
い。それより（彼女とせつかく）結んだ縁が切れは
しないかと、その方が気がかりだ。

っ

①66 月ツキ見ミりば 昔ムカシ 忘ワシりゆらでイしりば
思ウミどウまさる 忘ワシりならむ

①67 月日ツキヒながみりや 忘ワシりゆらとウ思ウミや

※月と星に願立てをして、二人の親が百歳まで長命に
あることを願おう。

①71 月に髪カミすらち 露ツルシにすすぬらち
吾ワが通トる道ミチは 他人タニは知らむ

※月で髪をとかし、露で着物のスソをぬらして私が通
る道を他人は知らない。

①72 月ツキかくす柳ヤナギ なじ欲ホしヤ有アしが
まにまにぬ彼氏サトウが 立ちユらとウ思ウムてイ

※月を隠す柳の木を切り倒したいが、たまに柳の下に
彼氏が立つかと思うとそうもできない。

①73 鶴ツル亀カメぬ山ヤマに 照テり上アガる御月ウツキ
若松ワカマツぬ枝エダに かかるしぬち

※鶴亀の山に照り上がったお月様をみたら、若松の枝

思ウミや余計ヨケイまさる 忘ワシりならぬ

※月（月日）を見たら（経過したら）昔のことを忘
れられると思ったなら、かえって思いはつるばかり
で忘れることができない。

①68 月見ツキミりば昔ムカシ かわらじに照テゆい
うびらじに寄ユたる 年トシぬ恨ウラみしヤ

※月を見たら昔とかわらずに照っているのに、思いが
けずにとつてしまった年が恨めしい。

①69 月ツキは山端カクに 隠カクりてイどウ行イちユる
いちヤがしユーる彼女コノメめ わてが事コトヤ

※月はだんだん山陰に隠れていくが、二人はこれから
どうしたものか彼女よ。

①70 月に願ガン立てイてイ 星ホシに願ニゲ立てイてイ
二人親タニウヤがなし 百世ムムニヨ願ニゲら

にかかっているよ。

①74 つつしみぬあーしどウ 人チユぬ上ウなゆる
我ワガままぬ果ハてや 人チユぬ目メ下シヤ

※謙虚な人間であつてこそ人の上に立つことができ
る。わがままな人間は人の上に立つことはできない。

て

①75 天テンぬ群ア星リフシや 他人タニぬ上ウどウ照テゆる
黄金オウゴン三サンつ星ホシや 吾ワ上ウ照テゆい

※天の星は他人を照らすが、黄金三ツ星は私の上で輝
く。

①76 天テンぬ星ホシだまり ゆみやさにしゆい
吾ワが思オモぬ事コトヤ さにやしやむ

※天の星でさえ数えれば数えることができるのに、私の思いは多くて数えることができない。

と

①77 年^{トウシ} ゆみや四五十^{シゴジユ} 肝^{チム}や今^{ナマワラビ}童^コ
またむど^ムウてみ^ミー欲^{ボク}しヤ 元^{ムトウ}ぬ十八^{ジユウハチ}

①78 年^{トウシ} ゆみや四五^{ククル}十^コ 心^{ココロ}や今^{イマ}童^コ
いちヤがし^シユ^ユーる^ル吾^ワ心^{シン} いし^{イシ}ヨに童^コ

※年は四、五十になるが気持ちは子供です。また元の十八にもどりたいものだ(どうしよう私の心はいっも子供みたいです)。

①79 年^{トウシ} は早^{ハヤカワ}川^{カハ}ぬ^ヌ 流^{ナガ}り水^{ミヅ}心^{シン}
う^ウびら^{ビラ}じに寄^ユたぬ^{タヌ} 年^{トウシ}ぬ^ヌ恨^{ウラ}みしヤ

※年は、流れの早い水のようなものだ。思いがけずと

った年が恨めしく思われてならない。

①80 年^{トウシ} 数^{カズ}えりば^バ 流^{ナガ}り水^{ミヅ}心^{シン}
ふりむ^ムど^ドウてイ^イみ^ミー欲^{ボク}しヤ 元^{ムトウ}ぬ^ヌ姿^{シガタ}

※年を数えると流れる水のようなものだ。もう一度若い頃の姿になりたいものだ。

①81 年^{トウシ} や寄^ユいま^マさる^ル 向^{ムコ}ぬ^ヌ島^{シマ}近^{チカ}き^キ
いちヤし^シ別^{ワカ}りゆい^{ユイ}よ^ヨ は^ハなし^{ナシ}産^{ナシ}子^コ

※年を重ねるほどに、あの世が近く感じられる。どうしていとしい子供と別れることができようか。

①82 年^{トウシ} や寄^ユいま^マさる^ル 花^{ハナ}や咲^サちち^{チチ}ぶ^ブる^ル
吾^ワ身^ミや後^{コノ}生^{ウマユム}向^{ムコ}てイ^イ 暮^クらし^シなら^ラむ^ム

※年はとる。花は咲きしぼんだ。後生が近くなった。自分は落ちついて暮らすことができない。

①83 時^{トウキ} どウ^{ドウ}ひ^ヒぎ^ギみ^ミゆる^{ユル}側^{ソバ}に^ニう^ウむ^ムとウ^ウ思^シり^リ他^タ人^{ジン}にな^ニび^ビく^ク
な^ナよ^ヨ恋^{コイ}し^シ 彼^{カノ}女^メめ^メ

※時が経っても側にいるものと思ってく下さい。ほかの人にどうぞ心変わりしないようにしてください、いとしい彼女よ。

①84 時^{トウキ} ぬ^ヌ鐘^ネ守^{モリ}り^リ 目^メ打^ウち^チす^スる^ル間^マむ^ム
時^{トウキ}は^ハ世^セぬ^ヌ中^{ナカ}ぬ^ヌ 宝^{タカラ}で^デイ^イむ^ムぬ^ヌ

※時間を守りなさい。まばたきする間であつても。時間^マは^ハ世^セの中^{ナカ}の^ノ宝^{タカラ}と^トい^イい^イま^マす^ス。

①85 妻^{トウシ} とウ^ウニ^ニン^ング^クル^ルは^ハ う^ウど^ドウ^ウる^ルは^ハな^ナし^シヤ^ヤあ^アん^ンか^カや^ヤ
妻^{トウシ}や^ヤ親^{ウヤシ}心^{シン} ニ^ニン^ング^クル^ルど^ドウ^ウは^ハな^ナし^シヤ^ヤ

※妻と愛人はだれがかわいいか。妻は親のようなものだから、愛人の方がかわいい。

①86 飛^{トウ}び^ビぬ^ヌフ^フア^アー^アト^トウ^ウだ^ダま^マい^イ 羽^ハ合^アち^チ飛^{トウ}び^ビゆ^ユい^イ

な

吾^ワぬ^ヌむ^ム羽^ハ合^アち^チ う^ウら^ラと^トウ^ウ飛^{トウ}ば^バだ^ダな^ナ

※飛ぶ鳩が羽を合わせて飛ぶように、私もあなたと羽を合わせて飛んでみたいものだ。

①87 な^ナた^タが^ガ唄^{ウタ}聞^キきは^ハ 眠^ネる^ル目^メむ^ム覚^サみる^ル
な^ナひ^ヒむ^ムや^ヤわ^ワや^ヤわ^ワと^トウ^ウ あ^アび^ビて^テイ^イ聞^キか^カし^シ

※あなたの歌を聞くとねむたい目も覚めます。もっとたくさん柔らかに歌って聞かせてください。

①88 流^{ナガ}り^リゆ^ユさ^サ彼^{カノ}氏^{ウヂ}め^メ 吾^ワぬ^ヌす^スく^クて^テイ^イ給^{タマ}り^ル
世^セ間^マ沙^サ汰^{タイ}ぬ^ヌ た^タた^タぬ^ヌう^ウち^チに^ニ

※私のことを思うのでしたら世間に波風が立たない間に思ってください。

189 流^{ナガ}りゆる水に 桜花^{ウヅ}浮きてイ
色美^{イルシユ}らさあたりや すくてイ見ちやむ

※流れている水に桜の花ピラが浮かんでおり、色が美しかったのですくって見ました。

190 流すかい流ち 暮らすかい暮らち
暮らさらになりや とウめてイいもり

※月日が経つだけ暮らしてみても、暮らせなくなったら私をさがしておいでください。

191 七十三願^{ミヤ}てイ 八十五む願^{ミヤ}てイ
八十八歳までイむ 御祝^{ウイチ}しヤーぶら

※七十三、八十五歳まで長命をお願いし、八十八歳になつたらお祝いしましょう。

192 難儀^{ナニ}苦しみは 腕^{トイシ}みがく砥石
とウぎやとウぐからに 光^ヒいじてイ

※錦、絹の着物は外側の飾りである。心を磨くことが人間の値打ちである。

195 西^タに立つ雲^{クム}や 吾親^{ワウヤ}ぬ姿^{シガタ}

※庭の柳の枝は風になびき、十五夜のお月様は、露の玉を散らす。

立ち^タ変^カわい変^カわい 見^ミしてイ給^{ケボ}り
※西の空の雲は、私の親の姿にそっくりです。何度でもその姿を私に見せてください。

196 彼女^{ニソ}が畑^ハや吾畑^{ワハ} 畑^ハ一畑^{イチハ}やりや
畑^ハぬ何時^{イツ}んたねむ 見^ミやイどウしゆる

※彼女の畑も私のものである。畑が一か所にまとまっておればいつも見ることができのだが。

197 庭^ニぬ菊^{キク}ぬ花^{ハナ} 節^{フシ}待^マちユてイ咲^サちユい
吾^ワちやむ節^{フシ}待^マちユてイ 咲^サちどウしゆる

※庭の菊の花は時期を待つて咲く。私たちも時期を待つておれば、菊のように咲くことができるよ。

198 庭^ニぬ糸^{イト}柳^{ヤナギ} 風^{カゼ}にさそわりる
露^{ツツキ}ぬ玉^{タマ}散^チらす 十五夜^{ウツキ}ぬ御^ミ月^{ツキ}

200 値^ネむちなぬ者^{モノ}は 道^{ミチ}ばたぬ小^コ石^{イシ}
道^{ミチ}ぬゆきかいぬ 邪^ヤ魔^マになゆり

※値打ちのない者は、道ばたの小石と同じで、往來の

※難儀苦勞は腕を磨く砥石のようなものである。磨けば磨くほど光が増えてくる。

193 今^{イマ}どウ吾^ワぬ笑^ワれる 吾^ワが咲^サかば見^ミより
ニジぬ上^{ウヅ}に咲^サちやる 花^{ハナ}ぬぐとウに

※いま私を笑っているが、トゲの上に花が咲くように一花咲かせます。そのときの私を見てください。

に

194 にしき糸^{イト}衣^{キヌ}は 外^{ストウ}側^{ガワ}ぬ飾^{カザ}い
心^{ココロ}磨^ルちユしどウ 人^{ヒト}ぬ値^ネむち

ぬ

199 ぬさばゆぬ者^{モノ}に 善^ユか人^{ヒト}やねさみ
破^ヤり布^フ着^キち美^チらさ 身^ミ持^ムち美^チらさ

※派手好みの方にいい人はいない。みすばらしいなりをしていても、きちんとしていれば、身持ち(礼儀)もきちんとするものだ。

ね

邪魔である。

は

⑳初みてイドやしが 合をさがりがしゆら
気張てイ弾ちじやしヨリ 合ーち見ヤーぶら

※初めてで合うかどうか、どうぞ三味線を弾いてみて
ください。(何とか)合わせてみましょう。

㉑半崎ぬ黒石 隠りたや見ヤーたや
永嶺イシヤ姉が 立ちヤや座ちヤや

※半崎の黒石は波で見え隠れし、永嶺のイシヤ(女の
人の名) 姉は立ったりすわたりしているよ。

㉒浜に打つ波は 打ち返し打ち返し
彼女しのお彼氏は 行じヤや来ちヤや

※畑の豆でさえ、粟にまきついているのに、好きな彼

㉓畑ぬ豆だまり 粟ぬ首抱ちユイ
ぬがゆ思彼女め 吾首抱かの

※浜に打ち寄せる波が寄せては返すように、彼女をた
ずねてきた彼氏は(彼女の家の門前を) 行ったりき
たりしているよ。

㉔春に働きや 夏やなりしだる
秋は取やちみてイ 冬は豊

※春に働いておけば、夏は実り、秋には収穫して、冬
は豊かに暮らせる。

㉕はまくらぬ花や 爪先に染みてイ
親ぬめーぬ事や 肝に染みり

※ほうせんかの花びらをすつて爪に染めるように、親
のおつしやることはしっかりと肝に銘じなさい。

女よどうして私の首に手をかけてくれないのか。

㉖花やりばにおい 枝ぶりや要やむ
人や肝心 姿要やむ

※花ならば枝ぶりよりも香りである。人間なら気心が
大事で、容姿ではない。

㉗野原出てイ見欲しヤ 百合ぬ花見欲しヤ
うりよか見欲しヤ 吾親ぬ姿

※野原に出て百合の花を見たいと思うが、それよりも
見たいのは、自分の親の姿である。

㉘花じ露などウてイ 風にむまりヨーか
天じ星などウてイ 御待ちしヤーぶら

※花で露になつて風にもまれるよりは、天で星になつ
て、あなたをお待ちしましょう。

㉙百がりむ生かぬ 朝顔ぬ命
世間あたり固さ あてイヤしまんど

※朝顔が、百日もたないように、(我々が百歳まで生
きる)とはむつかしいことだ。(ゆえに) 世間での

ひ

㉚恥知らぬ者は 馬牛ぬ類
たとへ人なみぬ 姿あてイむ
※例え人並みの姿をしていても、恥を知らない者は馬
や牛と同じである。

㉛はいとウ思や明る 夏ぬ夜やしが
心に物思みば 夜明きぐるしヤ

※はつと気がつくとも明ける夏の夜だけれども、考えこ
とをする夜は明けにくいものだ。

人あたりというものは、きつくあつてはいけませんよ。

白鷺やあらん 姉妹神がなし

213 人ぬ上見ちユてイ 吾が身ひきしみり

ひきしみぬ有しどウ 人ぬ手本

※他人の行動を見て、自分をひきしめなさい。ひきしめることのできる人が、他の人の手本になる。(人のふりを見て、我がふりをなおせと同じ)

※船のへサキに白鷺が止まった。それは、白鷺ではなく姉妹神(航海の神)です。

216 東風ぬ吹きや 海ぬ底荒らす

吾が悪さあてイどウ 他所む荒らす

※東風が吹いて、海の底を荒らすように、自分の行いが悪いから世間をさわがす。

ふ

214 深淵ぬ底や 足下ぬ暗闇

一足誤まりや 地獄さらみ

※深いふちの底も、足元の暗闇も同じようなものです。どちらも一歩誤れば地獄です。

217 下手なくせからどウ 吾自慢しゆる

たしなみぬ有しは 人ぬ下ーから

※下手な者ほど自分の自慢をしたがる。たしなみのある人は、人の下手、下手にあるものだ。

215 舟ぬ外どウむに 白鷺ぬるしゆり

ま

218 誠 真実は神様ぬ心

誠守ゆしどウ 神む守る

※誠、真実は神様の心です。誠実にある人を神様は守ってくれます。(何いことにも誠実にあれ)

221 枕くら枕 物語るな枕

彼氏が事 吾事 語るな枕

※枕よ枕、物を言わないでください。彼氏のこと、私のことを他人に言わないでください。

219 誠 真実や 天とウ地ぬ鏡

誠うちじやしや ぬー恥じみ しユーよ

※誠、真実は天地の鏡です。誠実に振る舞っておれば何も恥ずかしい思いをしないでもすむ。

222 道じ露なとウてイ 人に踏クまりヨーか

花じ露なとウてイ 御待ちしヤーぶら

※道で露になって人に踏まれるよりは、花で露になってあなたをお待ちしましょう。

220 誠する故どウ 後やいちまでイむ

思事かなてイ 千代ぬ栄

※誠実にあつてこそ、願いごとがかない、後々いつまでも千代に繁栄するのです。

む

223 物欲しやでイ来ちな 酒欲しやで来ちな見欲しや愛

しや有てイビウ くまとウめてイ来ちヤむ

※物や酒が欲しくしてきたのか。(いいえ) いとしい皆
さんに会いたくて、ここを探してきました。

②21 百田白紙に 親ぬ姿うつち
朝夕ふちくるに 抱ちうい欲しヤぬ

※白い紙に自分の親の姿を書いて、朝夕ふところを抱
いていたものだ。

②25 虫は口からビウ 綿糸吐ちユる
人は口からビウ 悪しヨ吐ちユる

※カイコ虫は、口から綿糸を吐き出すが、人間は口か
ら悪言を吐き出す。

②26 昔くだみたぬ アダン葉どウやしが
今ぬ世になりや 頭にかみてイ

※未亡人は哀れなものだ。身におぼえないことや、
他人のことまで、私のことのようにうわさされる。

②30 山ぬ木ぬ高さ 風に憎まりてイ
肝高さ持てイば 他人から憎まゆむ

※山の高い木が風に嫌われるように、気位が高いと他
人から嫌われる。

②31 やくさみやしユてイむ うら夫やとウらむ
同じやくさみどウ 夫なしユる

※後家の身であるが、あなたの夫をどう思うと思いませ
ん。同じ立場の男の人を夫にしますよ。

②32 闇路ふみわきてイ 浮世わたゆしむ
吾ぬなるちたべぬ 師匠ぬ御恩

※世間の闇路を無事に渡ることができるのは、私を指

※昔はアダンの葉を踏みつけていたのに、いまでは頭
の上にのせているよ。

②27 物始末しユーしとウ 物不始末しユーしは
人ぬ善悪ぬ 見本さらみ

※物をきちんと整理する人とそうでない人は、人柄の
善しあしを判断するいい見本である。

や

②28 約束がままに 吾がさだるやりば
道じ露なとウてイ 御待ちしヤーぶら

※約束したように、私が先になるようでしたら道で露
になってあなたをお待ちしましょう。

②29 やくさみぬ哀り あらぬくし立ちユイ
他人に立つくしむ 吾身に立ちユイ

導してくれた先生のおかげです。

ゆ

②33 寿ゆる年ぬ いちやし若さならりゆみ
牛ううゆん片時む 油断するな

※とつていく年をどうして若くできようか。牛を追う
一時の間も油断するな。

②34 許ち許さらぬ 神ぬ罪科は
親不幸なゆぬ 罪でイむぬ

※神罪を受けるほどの許しがたい罪を犯すことは、親
不幸の罪でもある。

②35 夜中 目ぬさみてイ 眠らぬ夜や
うまち取り寄してイ かよい煙草

※夜中に目が覚めて、寝れない夜は火を取り寄せてかよい煙草をしよう。

ら

②36 樂するな童 ぶゆするな若さ

年寄てイぬ末は 哀りでイむぬ

※子供のときから樂をし、怠けていると、年をとつてから哀れな目にあうぞ。

わ

②38 別りゆぬ袖に におい移ち置かば
においぬある間や 思てイ給り

※別れる時、袖においを移しておきますから、においのある間は私のことを思ってください。

②39 別りてイヤ行じむ 忘れてイは給んな
時々ぬ便り 待たち給り

※別れていつでも私のことを忘れないでください。あなたからの便りをお待ちしております。

り

②37 各氣口沙汰は 足らぬ故からどウ
満ちてイあーぬハミは 音はねさみ

※倍氣口論は、思慮が足りないからする。いっぱい満ちてあるカメは音がしないものだ。